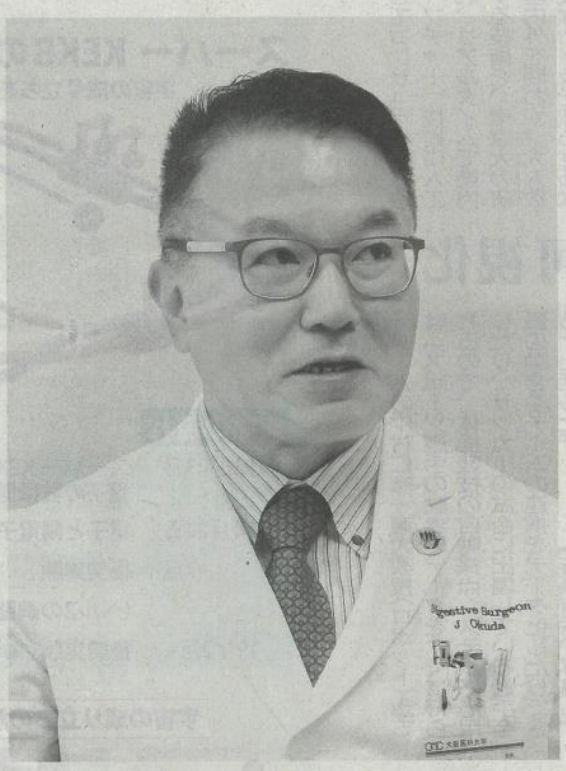
大腸がんの腹腔鏡手術で国内トップレベルの手術数を誇る大阪医科大付属病院がんセンターの奥田準二特務教授(59)。患者にとってより良い医療を提供し続けるためには、医療関係者の自己成長が欠かせないと「外科医塾」の活動を始めた。人としてどう生きるかが一番大事と説く奥田特務教授に思いを聞いた。【大道寺峰子、写真も】

大阪医科大付属病院がんセンター

2018.5.31 毎日(m) 13

奥田準二特務教授

人を磨く「外科医塾」開催



おくだ・じゅんじ　1984年大阪医科大卒。93年、腹腔鏡下大腸手術を開始。同大准教授などを経て、2014年から現職。公開ライブ手術や、大腸がんの肛門温存術で高い実績を誇る。中国・北京の中日友好医院客員教授なども務める。

――医療の進歩で、人生100年時代といわれるようになりました。

奥田　医師になって35年目になりますが、この間、医療を取り巻く環境は大きく変わりました。今はインターネットなどで、どの病院で、どういう治療が受けられる、のか、手術実績などが簡単に調べられます。また、かつてはセカンドオピニオンなどが一般的でなく、医師や治療を変えることは難しかった。現在はがん患者さんが治療を選べる、いい時代になったと感じます。

しかし、がんと診断されたら本人や家族はやはり悩みます。いくら治療が選択できるようになったといっても、住む場所や金銭的な問題、医師との相性などにも左右されます。また人生100年になると、死にたくても死ねない人が増えるともいわれます。どう生きるべきか、個々の生き方が今まで以上に重要です。どんな治療を望むかも、患者ごとに大きく異なります。

――そうした状況の中で、なぜ外科医塾を始められたのですか。

奥田　新たな治療が次々と開発され、医療者は常に学び続ける必要があります。一方で新しい技術や知識を追い求めるあまり、患者さんの思いが後回しにされ、患者と医療者の間にずれが生じていないか。どんないい治療や医療機器、施設があっても、結局は人です。医療者以前に人間としてどうあるべきかが問われます。

特にこれからの医療は想像性と創造性の両方が大事です。患者の思いに対する想像力、そして新たな問題に対処する創造力です。いくら最新の技術や知識を身に着けても、すぐ古くなってしまいます。またその人にしかできない治療では多くの人を救うことはできません。しかし、人の役に立つという根本部分がしっかりしていれば、技術や知恵を革新性や創造性へと自然に発展させていけると思います。

さらに医師として、全般的に平均点が取れることより、それぞれが得意とするところを磨き、トータルとしてより良い医療を提供することが大切になりつつあります。それぞれの医師が自らの目標を定め、試行錯誤しながら能力を伸ばしていかなければなりません。そのためには、先生と生徒のような一方通行的な教育ではなく、刺激し合えるネットワークが重要です。互いの才能を認め、伸ばし合える同志のような存在が鍵で、そのための塾です。

互いに学びと刺激／想像力と創造力を

――具体的にはどのように進められているのですか。

奥田　これまでに東京と大阪で1回ずつ開催し、毎回数人の医師らに講演していただきました。それぞれの専門分野の話に加え、その人の人生を語ってもらっています。今後も毎年続けていきたいと考えています。また医師だけでなく、幅広い医療関係者が参加でき、通常の学会などとも違うネットワークを築く機会になっています。大勢の参加というより、本当に学ぶ意欲のある人に来てほしいと願っています。

実際に話を聞いてみて、何かに抜きんでている人は、自分なりのルール＝習慣を持ち、継続している点で共通しています。日々の努力の積み重ねが大事とよくいわれますが、本人は毎日楽しくて続けているので、努力と思っていない人も多い。自己成長とは改めてそういうことなのだと感じました。

私は「心の根　覚悟の幹　知恵と行動の枝」と言うのですが、これがあればどんな時代でもより良い医療の花が開き続けてくれると期待しています。